

『姑嫂双修宝卷』について

—宝卷のユーモア—

仇 俊

はじめに

宝卷は、元の時代に生まれて現在まで行われている、宗教的な性格をもつ歌と語りによる文学のテキストである。本論は、この宝卷のうち、『姑嫂双修宝卷』という作品について、ユーモアに焦点をあてて考察したものである。

中国の宝卷研究の第一人者である車錫倫は、宝卷を次の五つに分類している。⁽¹⁾すなわち、(1) 神道故事宝卷（各種神格にかかわる）、(2) 婦女修行故事宝卷（女性が苦難を経て信仰により救済される）、(3) 民間伝説故事宝卷（民間伝承を題材とする）、(4) 俗文学伝説故事宝卷（小説や戯曲などを題材とする）、(5) 時事故事宝

卷（時事的な話を題材とする）。『姑嫂双修宝卷』はこのうち、(2) 婦女修行宝卷に分類される。

この類の宝卷はいわゆる「女人受苦もの」で、その多くは主人公である女性が苦難を受け、信仰を貫き、救済されるあるいは昇天する、という内容をもつ。しかし、『姑嫂双修宝卷』は、これとは異なる。「女人受苦もの」であれば主人公になるはずの陳氏は、脇役になっている。そして、主人公の二姐は、たしかに、病気になって、信仰の力によって救われ、その後、昇天する。しかし、これらすべては、物語の最後の部分で起こるにすぎない。全体にみると、物語の中心を占めるのは、「受苦」ではなく、二姐の悪辣な性格と毒舌、またそれによって引き起こされる騒動の描写である。よって、この宝卷には、通常の宝卷とくらべて、ユーモアの要素がたいへん豊富に含まれている。

底本には、民国三（一九一四）年に浦怡雲なる人物が書写した本を用いる（以下、浦怡雲抄本と呼ぶ。とくに断らないかぎり、引用や分析はすべて浦怡雲抄本による）。これは、現在までに入手したテキストのうち、このテキストを用いることが、ユーモアについて論じるためにもっとも有効であると考ええるからである。

以下、第一章『姑嫂双修宝卷』のあらすじ、第二章『姑嫂双修宝卷』のテキスト、第三章『姑嫂双修宝卷』のユーモア、の順に述べる。第四章はさらに、第一節 ことばのユーモア、第二節 内容のユーモアに分けて論じる。

第一章『姑嫂双修宝卷』のあらすじ

『姑嫂双修宝卷』のあらすじは、次のとおりである。

大同府大同県概里村に堵という一家があつた。夫の堵有はすでに亡くなつたが、妻の曾氏は健在である。夫婦のあいだにふたりの子ども、すなわち息子の堵大官とその妹の二姐がいる。大官はおとなしい男である。二姐は性格が悪く、毒舌で、始終トラブルを起こしている。大官の妻は陳氏といい、小さい時からずっと仏教を信じてきた、氣立てのよい人である。

ある年の二月十九日、観音さまの誕生日に、陳氏は朝早くから起きて、家族のために念仏していた。二姐はいつもは寢坊をするのに、この日はわざわざ早く起きたし、陳氏の祈願のことばをわざと家族を呪うことばと聞きま

ちがえ、母親の曾氏に告げ口をした。曾氏は陳氏を叱りつけ、息子の大官を罵倒した。大官は腹を立てて、妻、陳氏の頬を平手打ちした。その騒ぎを聞きつけて、近所の六十六歳の婆さんが仲裁しに來た。大官には嫁を殴らないようにと忠告し、曾氏には陳氏がよい嫁であり、念仏するのもよいことだと言つてきかせた。二姐には、お前もいつかは嫁となつて今の陳氏と同じ境遇になるのだ、と諭した。そして最後に陳氏をなだめて帰つた。

このように、この家ではいつも騒動が起こるので、かまどの神様が怒つて、天上の皇帝である玉皇大帝に報告した。その結果、曾氏が病氣になつて亡くなつた。

数年後、二姐は結婚すべき年になつてゐるが、もらい手がない。前村の姜家に母親とその息子の二官がいて、二官に嫁を迎えなくてはならないが、貧乏でできない。そこで、姜親子は二姐を嫁にもらうことにした。大官は十二兩の結納金を要求、姜家の母はなんとかこれを工面して、二姐を嫁にもらつた。大官は陳氏と相談し、二姐にはふつうの嫁入り道具ではなく、これまでの悪行・悪口を帳簿に記録し、これを持たせることにした。字の書ける人に頼んで書いてもらつと、三十冊にもなつた。

結婚をしても二姐は相変わらずで、いつも二官やその

母親と喧嘩ばかりする。二官と母親は二姐を離縁したいと考え、二姐が里帰りしたときに、仲人を呼んで相談することにした。仲人を接待するため二官が魚を買って来たが、母親がそれをかまどの上に置いたままにして、隣の猫に食べられてしまった。二官の母親は腹を立て、包丁でとなりの猫をまつぶたつに切った。猫の主人である隣りのおばさんは怒って、弁償をしろという。言い争いで負かされそうになった二官の母親は、とうとう実家の堵家まで二姐に助けを求めに行き、二姐が隣りのおばさんと喧嘩し、おばさんを言い負かして、勝利した。

結婚して翌年の秋、二姐は病気になった。嫂の陳氏は熱心に看病し、二姐に信心を勧めた。二姐は発心して、陳氏と一緒に修行した。そして、二姐は六十歳、陳氏は八十歳の時、積んだ功德の果報を得て昇天した。

このように、『姑嫂双修宝卷』は、内容のほとんどが家庭内のドタバタで、卑俗さが基調になっている。宝卷特有の、信仰から来るまじめさはほとんど失われ、全巻ブラックユーモアに覆われている。

第二章『姑嫂双修宝卷』のテキスト

ここで、『姑嫂双修宝卷』のテキストについてみておくことにしたい。車錫倫の『中国宝卷総目』（以下「車目録」）によれば、『姑嫂双修宝卷』は『姑嫂宝卷』『姑嫂同修宝卷』『姑嫂双修』とも称され、次のテキストが現存する。²⁾なお、「」は所藏者である（車目録では略称が使用されているがここでは全称を示す）。

- (1) 清光緒十六年（一八九〇）呉維淞抄本、一冊。
〔蘇州市戲曲博物館〕
- (2) 清光緒三十四年（一九〇八）呉介人抄本、一冊。
〔李世瑜〕
- (3) 清宣統三年（一九一一）抄本、一冊。〔国家図書館〕
- (4) 民国三年（一九一四）浦怡雲抄本、一冊。〔南開大学〕
- (5) 民国十六年（一九二七）許少卿抄本、與『獅吼宝卷』合訂一冊。〔李世瑜〕
- (6) 民国二十年（一九三一）呉惠堂抄本、一冊。附

- 『河東獅吼』宝卷。〔中国文聯資料室〕
- (7) 民国二十七年（一九三八）孫炳英抄本、一冊。
〔蘇州市戲曲博物館〕
- (8) 范雲亭舊抄本、一冊。〔鄭州大學圖書館〕
- (9) 舊抄本、一冊。卷名『姑嫂同修宝卷』。〔中国社会科学院文学研究所資料室〕
- (10) 舊抄本、一冊。〔中国芸術研究院戲曲研究所〕
- (11) 舊抄本、一冊。〔哈尔滨師範大學圖書館〕
- (12) 舊抄本、一冊。卷名『姑嫂宝卷』。〔首都圖書館〕
- (13) | (14) 舊抄本兩種、各一冊。〔首都圖書館〕

以上十四種の抄本が記録されているが、これ以外に二種の抄本が上海図書館に所蔵されていることが、筆者の調査でわかっている。十六種の抄本が残されているので、『姑嫂双修宝卷』は一定の人氣があったと考えられるが、木版本、石印本などの刊行は確認されていない。この理由を考えなくてはいけないが、後日を期したい。

浦怡雲抄本は、車目録(4)にある。このテキストは、『宝卷 初集』第三十九冊および『民間宝卷』第十四冊に影印が収められ、簡単にみることができ³⁾る。原本については、筆者は人を介して数回、その写しの提供を南開

大学図書館に依頼したが、原本が行方不明であるという回答が責任者から得られただけであった。表紙と思われる最初のページ中央に「姑嫂雙修卷 全集」、右下方に「周煥文正」とある。末尾の一行に、「民國三年十月 日立浦怡雲抄全」と記されている。半葉は前半（『宝卷 初集』一九二—二二〇頁）と最後の半葉（同二三—二二頁）が八行、その間（同二二—二三二頁）が七行。一行は散文の最初の一行は十八字だが、途中、二十八字にもなるところがある。原寸は不明だが、細い筆を用い、小さめの字で書かれているようである。半葉の行数がかわる二二〇頁と二二二頁のあいだで、筆もかわっている。整った字体とはいえない。全体にふぞろいな印象を与えるテキストである。

筆者は、これまで、浦怡雲抄本以外に、以下の三種のテキストを見た。

車目録(1)の光緒十六年（一八九〇）呉維淞抄本一冊。筆者は、知人を介して蘇州市劇曲博物館に依頼し、原本のコピーだけを得た。半葉八行、一行は約二十一—二十四字でそろわない。細めの筆が用いられ、ある程度の速度をもって書かれたように見受けられる。最後の一葉表（裏表紙の裏）に、本文とは別の太い筆で、「光緒拾

陸年 吳維淞實」と大書されているが、これ以外に書写の事情などを知らせる文字はない。題名についても、最初の一行に「姑嫂双修」の四字があるだけである。

車目録のない抄本の二つを、「史梅亭抄本」「無名氏抄本」と呼ぶことにする。

史梅亭抄本について、筆者は上海図書館で原本を閲覧し、また画像を取得した。表紙左上に「姑嫂双脩」、左下に「史梅亭藏」と大書されている。また、最後の一葉、本文の末尾に、「光緒二十四年太歲戊戌九月初旬史梅亭抄録」が一行、次に「葉根寶 全録」が下方に一行、さらに「共廿五頁」と添えられている。光緒二十四年は一八九八年である。半葉七行、一行は約二十一—二十四字。ための筆を用い、整った字体で書かれている。

無名氏抄本についても、筆者は上海図書館で原本を閲覧し、また画像を取得した。本文以外の書名、抄録者、年代などにかかわる文字はいっさいない。ただ、巻頭偈に「双修宝卷初展開」という。末尾一行に、「抄急心慌乱、未知差不差（急いで書写して落ち着かず、あるいは誤字があるかもしれない）」という小字の書きこみがある。半葉七行、一行は十六字。おどろ字も一字としてすべて十六字である。ための筆が用いられ、一文字一文字

丁寧にかかれたようで、全体にかなり整った印象を与える。

この四種のテキストのあいだで、内容に大きな隔たりはないが、字句の異同はたいへん多い。これについては後で述べる。

第三章 『姑嫂双修宝卷』のことは — 吳方言 —

『姑嫂双修宝卷』のユーモアについて考えるまえに、もうひとつ、この宝卷に用いられている吳方言についてみておきたい。

宝卷には、長江デルタ、すなわち吳方言地区で生まれ、また唱えられてきたものが多い。しかし、宝卷は、通常、官話の語彙を用いて記される。宝卷を読み語ること、すなわち「宣卷」は、中国において、現在も行われており、その調査報告もなされている。それらによれば、宣卷は現地の発音によって行われているが、用いられているテキスト、すなわち宝卷は、やはり官話化されているとい⁴⁾う。

ある宝卷が吳方言地区で形成されたとき、そのことは韻文の押韻にもっともよくあらわれる。すなわち、吳方

言に特徴的なnとngの通押が普遍的にみられる。このほか、呉方言の語彙が散見され、呉方言の発音に起因する特徴的な文字の使用・誤用もみられることがある。しかし、これは理解に支障をきたすほど多くない。

しかし、一部に、呉方言の語彙を多く含み、呉方言がわからなければ読解が困難になるテキストがある。⁵⁾『姑嫂双修宝卷』もその一つである。原文をみてみよう。呉方言の語彙と考えられるものに傍線をほどこした。

且説、大同府大同縣概里村、有一個人、姓堵名有。

自己早亡、娘子寡居。曾氏所生一男一女、其子叫大官、性情温良、其女叫二姐、心奸口快、慳慳非凡。以

後娶个媳婦陳氏、極其孝順、自小娘家吃胎裡素个、

最喜修行念佛。嫁只出来、看見阿婆凶惡非凡、要想念彌陀、恐怕老太婆、平日同搥不念佛。⁶⁾

さて、大同府大同県概里村に、姓は堵、名は有という人がいました。自分は早くに亡くなって、妻が一人残されました。その曾氏は息子と娘をひとりずつ生みました。息子は大官といって、温和善良な性格でした。娘は二姐といい、根性が悪く毒舌で、たいへんなじゃじゃ馬でした。その後、大官は陳氏とい

う嫁をもらいましたが、とても従順で孝行な人でした。母親の代から肉食を避け、信仰の生活と念仏をととても好んでいました。嫁に来てから、姑がたいへん恐ろしい人であることを知り、念仏を唱えたいと思っても、姑をこわがって、ふだんは唱えませんでした。

この一段では、「自小娘家吃胎裡素个」の「个(的)」と「嫁只出来」の「只(了)」、ふたつの虚字が呉方言の語彙である。しかし、実字が多いこともあって、この部分は普通話(共通語)の知識で理解することができる。

次に、観音菩薩の誕生日に二姐がわざわざ早起きをして、嫂の悪口を母親に言いに行くところを挙げる。

講到姑娘最喜暍晚朝。是日、曉得阿嫂浪念佛、就主倍打早起来、憶在隔壁頭、听到上念佛、就走到娘房里前、輕如重報与娘听。快点起来、阿嫂浪念佛。咳、二姐、等里念歇得。弗是。嚕、来刮咒罵。吓、乃啞咒法。到説、合家大小尽死絶。吓、有梗事个。老太太搭扒搭頼赶起来、不问頭三臉四就嗎。舍事務、清々早起咒嗎吾裡多死絶。

さて、娘は朝寝坊が大好きでした。しかし、この日

は、嫂が念仏を唱えるのを知っていて、朝、自分から早起きをしました。彼女はとなりの部屋で、念仏の声を聞きつけると、すぐ母親の部屋に行つて、さも大ごとだといわんばかりに言いました。「早う起きて。嫂さんが念仏してる。」「やれやれ、おまえ、やめさせておくれ(?)。」「そやないねん、呪つたり悪しぎまいうたりしてるで。」「えっ、なんて呪てるのや。」「一家全員大人も子どもも死んじまえ、とかや。」「なんや、そんなこと言うてるんか。」「この婆さんはばたばたと急いで起きてきて、有無も言わず大声でどなりました。「朝っぱらから起き出して、あたしらみんなくたばつてまえとは、どういふことや。」

ここでは、二姐と曾氏のセリフの、とくに虚字に多くの呉方言が用いられている。「晓得(知道)」「浪(在)」「憶(她。通常「伊」と表記される)」「上(做)」「等里(在這裏)」「来虱(在)」「乃哼(怎么)」「梗(那么)」「个(的)」「啥(什么)」「事務(事情)」「吾裡(我們)」「多(都)」が、それである。これらの意味を知らずに、この部分の会話を理解することはできない。ただし、誤

字・脱字もあるのか、この部分には呉語話者である筆者にもわかりにくいところがある。

このように、「姑嫂双修宝卷」においては、呉方言が多く使われている。方言の語彙は、ここで見たように、韻文(唱)に少なく散文(説あるいは講とも)に多い。散文のなかでは、叙述の部分に少なく、セリフ(白)の部分に多い。セリフでは、男性のセリフとくらべ女性のセリフに多い。とくに主人公の二姐のセリフに多いという特徴がある。そこで、もうひとつ、二姐をふくむ女どうしの会話、近所の六十六歳のおばあさんと二姐が言い争う場面を見てみよう。

太叔婆、你个説話不相同、吾裡阿嫂不曾来个辰光、
稱為得種田有穀、養猪有肉、老猪婆生子一壁咯
落、小鸡哺能虱化、個歇反个哉。吓、那哼反个哉
咳、個分吾裡阿嫂未了年半外、麦拖洞公、稻出子芽、
小猪只生两三隻、兩窠小鸡只出一隻。

「ばあさん、あなたのいうことはちがうで。うちは嫁がくるまで、穀物は作れば豊作、豚を飼うたら肉がたっぷり、かあさん豚はどっさり子を産み、ひよこがぎょうさんかえったもんや。そやけど今はその

反対や。「どないに反対やねん?」「嫁が来て一年半とちよつとたつけど、ムギはできて穴があく、イネは芽えが出てしても、子豚は産まれて二三匹、ふたつの巢から一羽のひよこがかえるだけ。」

このように多くの呉方言語彙を用いた『姑嫂双修宝卷』は、官話化したテキストが多いなか、卑俗なものに見える。

すなわち、あらずじ、テキスト、言語のいずれにおいても、『姑嫂双修宝卷』浦怡雲抄本は、かなり世俗化し、娯楽化したテキストであると考えられることができる。

では、以下、この宝卷のユーモアがよくあられた部分をいくつかとりあげてみよう。

第四章 『姑嫂双修宝卷』のユーモア

この章では、『姑嫂双修宝卷』のユーモアについて、第一節 ことばのユーモア、第二節 内容のユーモア、のふたつに分けて論じる。これらは、もとよりはっきり分けることはできず、論を進めるうえで便宜的な分類である。

第一節 ことばのユーモア

まず、宝卷の冒頭、開巻偈を、四つのテキストによってみてみよう。

呉維淞抄本（一八九〇年） 開巻偈なし。

史梅亭抄本（一八九八年）

人間嘴面又慳慳 人の世にはたいそう口の悪いヤツ

がいる

男女手脚有蠢蠢 男も女もロクでもないことするヤ

ツもいる

姑嫂従来和合少 小姑と嫂が仲よいことは もとも

と少ない

阿婆搵嫌媳嬾姦 姑は ここがいやあそこがだめと

嫁を嫌う

倘然姑娘嫌嫂醜 もし小姑が嫂の 醜いところを嫌

つたら

原来空做閑冤家 意味もなく あだに敵をふやすだ

け

浦怡雲抄本（一九一四年）

人間嘴面有慳慳 人の世にはたいそう口の悪いヤツ

が
い
る

男女手脚有**蠶蠹**
口くでもないことするヤツもいる
姑嫂原來和合好
小姑と嫂は もともと仲よくする
のがよい

阿婆搥嫌新婦**姦**
姑は ここがいやあそこがだめと
嫁を嫌う

倘然姑娘嫌嫂醜
もし小姑が嫂の 醜いところを嫌
ったら

原來空做**閑冤嫁**
意味もなく あだに敵をふやすだ
け

無名氏抄本（年代不明）

雙修寶卷初展開 双修宝卷はじまれば

諸佛菩薩降臨来 諸仏菩薩が降臨なさる

善男信女虔誠听 善男善女が敬虔な気持ちで聴けば
増福延寿免災殃 災難免れ福が増えて寿命も延びる

開卷偈におけるこの状況は、じつは四種のテキストの
特徴をよく示している。

宝卷の通例にいちばん近いのは、「○○宝卷初展開」
という常套句ではじまる無名氏抄本である。参考のため
に他の宝卷の開卷偈を挙げる。

『杏花宝卷』光緒五（一八七九）年、常郡樂善堂刊本

杏花宝卷始展開 杏花宝卷はじまれば

諸佛菩薩降臨来 諸仏菩薩が天より降（くだ）る

齋主虔誠齋念佛 信者がそろって敬虔にお念仏をと

なえれば

吉祥如意滿門来 幸せ門（かど）に満ち満ちる⁽⁸⁾

『花名宝卷』（紹興の宣卷人、何雲根さんのテキスト）

花名宝卷初展開 花名宝卷はじまれば

諸佛菩薩降臨来 諸仏菩薩が天より降（くだ）る

『王大娘遊地獄十殿宝卷』

王大娘卷初展開 王大娘宝卷始まれば

貞節寡婦又轉胎 貞節な寡婦は生まれかわってまた

人となる

我宣寶卷大家聽 宝卷を唱えますからみなさまお聴

きください

奉劝世上守節人 ご忠告をいたします 世の人々よ

貞節をお守りなさい

呉維淞抄本は散文からはじまり開卷偈がない⁽¹⁰⁾。史梅亭
抄本と浦怡雲抄本は、同じ偈が用いられており、⁽¹¹⁾「人間
嘴面又**慇懃**、男女手脚有**蠶蠹**」と冒頭からユーモラスな

表現があらわれる。これらの句は、人間世界への皮肉であることと、宝巻の通例と異なるふざけた表現であること、両方の意味で、ユーモアである。

すなわち、冒頭部分からみたとき、無名氏抄本は宗教性を保持したものの、浦怡雲抄本と史梅亭抄本は近い関係にあり、ともに宗教的性格がうすれて、世俗化・娯楽化が進んだものだと考えることができる。

なお、以下の舞台となった地名と登場人物の名まえからみても、史梅亭抄本と浦怡雲抄本が近い関係にあることがわかる。

呉維淞抄本 大同府概里邨

屠大徳、會氏、大観、二姐、陳氏

史梅亭抄本 大同府大同縣概里村

都六観、曾氏、大観、二姐、陳氏

浦怡雲抄本 大同府大同縣概里村

堵有、曾氏、大官、二姐、陳氏

無名氏抄本 山西大同府大同縣磬家村

都德卿、曾氏、福観、二姐、陳秀金

次に、先にも引用した、観音さまの誕生日に、嫂の陳氏が念仏をしていたのを、二姐が呪詛していると母親に訴えた場面をみてみよう。

二姐は、陳氏が「家族全員大人も子どもも死んじまえ」と言っていたといい、陳氏は「家族全員大人も子どもみな健やかでいられるように」とその息災を祈ったと説明する。それぞれのセリフは次のように示される。

呉維淞抄本 二姐「一家門在要死」

陳氏「一家門多清健」

史梅亭抄本 二姐「合家大小在要死絶」

陳氏「合家大小多清結」

浦怡雲抄本 二姐「合家大小死絶」

陳氏「合家大小多清潔」

無名氏抄本 二姐「我裡娘三个要死」

陳氏「保淥合家平安」

呉維淞抄本は、両方とも六字で文字数が同じだが、「死」と「健」は発音が似ておらず、聞き違いがなぜ起こったか、その理由がわかりにくい。史梅亭抄本は「絶」と「結」の発音が似ているが、二姐のことはが字余りで、文字数が異なる。浦怡雲抄本は、両方七字で文字数が同じ、「絶」と「潔」で発音が似ている。史梅亭抄本と浦怡雲抄本が近いことは、開巻偈と同じである。無名氏抄

本は二姐、陳氏ともに、セリフそのものではなく、内容の説明である。この部分だけに注目すれば、無名氏抄本、呉維淞抄本、史梅亭抄本、浦怡雲抄本の順に、ことば遊びが巧緻になっていることになる。

次に、二姐が二官と結婚して迎えた正月、二姐があるうことか、不吉なことばかり口にする。この部分を、浦怡雲抄本によってみよう。ここは韻文で示される。

猫獠嗎他齋猫盤 猫のことは「猫を供える皿(?)」
と悪く言う

吉話就尽萬千般 何千何万 縁起の悪いことばばかりを口にする

草繩搥叫弔杀鬼 呼ぶ わら繩を「首つり妖怪」といつも

點心就叫粉牲糰 お菓子は「粉のいけにえ団子」
竹篋到説蠱嘴棒 竹のはしは「口突き棒」

酒瓶叫仔行粮罐 酒瓶は「携帯用の穀物缶(?)」
油盞搥称豆边火 油のランプは「枕辺の火」

房子牢棚説不完 家を「牢屋」ととめどがない
丈夫叫俚急傷打 亭主の呼び名は「乱暴もの」

阿婆叫他棺材萱 姑ならば「棺桶母上(?)」

走出走進無好話 家の中でも家の外でもろくなことを言いません

家々生々尽搥完 (そのうえに) 家の中のあらゆる

道具を投げつくす

ここでは、二姐によって「ものの言い換え」が行われている。その対応は以下のとおりである。「猫獠」が「齋猫盤」、「草繩」が「弔杀鬼」、「點心」が「粉牲糰」、「竹篋」が「蠱嘴棒」、「酒瓶」が「行糧罐」、「油盞」が「豆(頭)边火」、「房子」が「牢棚」、「男人」が「急傷打」、「阿婆」が「棺材萱」。翻訳を示したが、十分に理解できないところがある。それは、呉方言のためではなく、ことば遊びのむずかしさによる。日常のなんでもなもの、意外な名まえを与えられている。

新年のめでたさをひっくりかえすため、とくに死に関係することばが多く用いられているのが興味深い。物語りのなかの人々にとつては聞きたくないものだが、物語りの外においてこの話しを聴く人々には、この「ずれ」はおもしろおかしいものとして感得されたであろう。

呉維淞抄本はこのくだりを欠いている。無名氏抄本は「一个新年並無一句好話(新年だというのによいことは

ひとつもいわず」というが、この韻文を欠く。史梅亭抄本は、浦怡雲抄本と同じと考えてよいが、次の異同がある。すなわち、浦怡雲抄本の「罵」が「罵」に、「吉」が「朧」に、「就」が「説」に、「酒瓶叫仔行粮籠」が「碗瓶叫做更飯碗」に、「豆」が「頭」に、「房子牢棚説不完」が「房屋就叫水車棚（下三字の横に「野猪圈」の書きこみあり）」に、「丈夫叫俚」が「男人搥叫」に、「阿婆叫他」が「阿婆搥叫」になっている。ここでもまた、史梅亭抄本と浦怡雲抄本が近く、娯楽化、世俗化が進んでいることが確認された。

『姑嫂双修宝卷』の二姐の悪辣な言動の描写は、現実の生活の中で口舌によってトラブルを起こす女性が多かったことを反映していると考えられるが、それだけではないだろう。中国の口頭の芸能では、「快嘴（早口）」の女性がしばしば登場する。たとえば、伝統演劇では、滑稽な女性役である「彩旦」がこれをよく演じる。また、白話小説では「快嘴李翠蓮」（『清平山堂話本』に収められる）がよく知られている。「快嘴」は内容がおもしろい上に、芸人や役者が「声の技」を披露することができるといって、上演上の大きな利点がある。観客にとっても、素晴らしい技を見るのは、とても気持ちのよいものである。

また、二姐の「快嘴」には、宣卷人が、自分の芸のレベルの高さを示す目的もあつたと考えられる。日常生活でほとんど使わないことばが、早口で演じられる。この部分は、「般」、「糲」、「碗」、「棚」、「萱」、「完」ときれいに押韻している。これらが一体となって、聴覚的な効果が高まる。このような部分は、宝卷の中のひとつの見せ場であつただろう。

先に述べたように、宝卷をうたい語る宣卷は現地の発音によって行われているが、用いられているテキスト、すなわち宝卷は、官話化されているものが大半である。

たとえば、現代の宣卷人、江蘇省呉江の朱火生所有の「劉王卷」のテキストが『中国農村の民間芸能』に収録されている¹²⁾。そこでは、劉猛將の父と再婚し、劉猛將をいじめる朱三姐が、悪辣な女性として登場する。そのセリフは、ストーリーを展開する上で必要なセリフという域を出ず、読むかぎりにおいては二姐のセリフほど精彩がない。しかし、朱火生の「劉王卷」には上演用メモがあり、朱三姐のセリフの前には、表情や手の動きなどについて、とくに多くのメモが記されている。具体的に数字を挙げれば、朱三姐のセリフ、全十六か所のうち、約三分の二、十カ所のセリフの前に、メモがある。聞き取

り調査によれば、朱火生はかなり人気のある宣卷人であったという。朱火生の「劉王卷」は文字で読むとあまりおもしろくないが、朱火生によって演じられるとユーモアの要素が加わり、娯楽性が高まったのだと考えられる。このことから考えれば、逆に『姑嫂双修宝卷』は、テキストとしてのおもしろさを意識したものであることがわかる。

第二節 内容のユーモア

『姑嫂双修宝卷』は全篇にユーモアの要素がみられるが、突出した場面として、二姐の結婚準備の場面と猫を殺す場面を見よう。まず、二姐の結婚準備の場面、二姐の嫁入り道具について、兄大官と嫂陳氏のふたりの間で交わされる会話である。

大官說道、娘子、日脚到哉、一息不存端正、舍个物事拉裡那處。陳氏道、丈夫、様色不办、姑娘要挑撥弄哄相成抖嗎、去买兩刀紙帛居来、釘兩本簿子、拿里日長世久个性事々非々、情々節々、計在簿子上。一號計開子、再買一只官箱、鎖好子没算装奩个哉。二官（筆者校…当作大官）道、娘子説話到也不差、

正梗沒哉。

大官はこう言いました。「なあ、もうすぐ（婚礼の）日がやってくるが、準備がぜんぜんできてへん。どないなもんを、どこで用意したらええやろか。」陳氏は言いました。「あんた、ちゃんとせんと、妹が文句言うてひと騒動になります。紙を二百枚買ってきて来てください。それで二冊の目録を作りましょう。そこに今まで長いこと、二姐が言うてきたことしてきたこと、あれやらこれやらみんな書くんです。全部書いたら、大きい箱（？）をひとつ買うて、（目録を入れて）鍵かけましょ。これで嫁入り道具になりますやる。」大官は言いました。「お前の言う通りや。そうしよう」。

大官即便往街坊 大官はすぐ町に出

紙花店上办嫁装 嫁入り道具の準備のために紙屋

さんへ行きました

别人家嫁装木匠做 よその家の嫁入り道具は家具屋

さんに作ってもらう

吾里嫁装請先生 うちの家の嫁入り道具は字の書

ける人にお願いをする

个性相嗎个説話事情先生寫得團團轉

二姐が言った悪口を書くのに先
生大忙し

扛扛十日苦心して ちようど十日苦心して

寫就簿子三十本 書いた目録三十冊

收收壹管箱 大きな木箱がひとつぶん

十二月念四好日到 十二月二十四日の婚礼の日がや

つてきて

姜家轎子娶新娘 姜家の輿が新婦を迎えにやって

来た

ここにも「日脚」「拉裡」をはじめ、呉方言が多く含まれている。ふたりの相談は、はじめ、差し迫った真剣なものに見える。時間が迫っている、二姐が怒るかもしれない。しかし、その解決方法はとてもいいかげんなものである。その落差が、ユーモアとして作用する。

嫂の陳氏は、二姐がいままで言った悪口や行ったすべての悪行の目録を合計二百枚の紙に記帳し、木箱に入れようと考えた。大官もそれがいいと言い、字の書ける「先生」に依頼した。すると、十日間かかって、三十冊もの帳面ができあがった。この部分の前半には、「兩刀」「官箱」ということが用いられ、後半では、「寫得団

団転」「十日」「三十本」「足足壹管箱」という誇張表現が用いられている。このように、誇張の程度が後になるほど高くなると、おもしろさがそれだけ増すことになる。

ここで、ひとつ気がつくことがある。この宝巻の冒頭部分には、陳氏の性格について、「とても従順で孝行な人でした。母親の代から肉食を避け、信仰の生活と念仏をととても好んでいました（極其孝順、自小娘家吃胎素个、最喜修行念佛）」と描写されていた。このような善良で敬虔な陳氏が、母親を亡くした二姐の親代わりにならなくてはいけない場面である。いくらお金がなくても、二姐の一生に一回の嫁入りのため、精一杯のことをするはずだ。中国ではこれが一般的な考えかたである。しかし、陳氏は、二姐がいままで行ったすべての悪行や言った悪口の目録を十日間かかって、百枚×三十冊の帳簿に書いて、木箱に入れ、これを嫁入り道具とした、というこれは矛盾している。なぜこのようなことになっているのだろうか。

この嫁入り道具は、のちに、二姐が隣人である二おばさんをやりこめるときに登場するので、物語りに必要なものである。人物形象からすると、主体性のない大官が

これを提案するのはふさわしくない。そこで、陳氏が提案することになったのだろう。この意外性は、おもしろいと感じられたのかもしれない。また、陳氏のこの行動は、聴衆たちに親近感を抱かせ、逆に、のちにこのような陳氏が二姐とともに信仰に励んで昇天する、つまり、この宝巻の名称「姑嫂双修宝巻」のとおりになることによつて、信仰の宣揚の効果がより増したのかもしれない。次に、この宝巻のブラックユーモアをよく表す、猫殺しの場面をみてみよう。猫を殺すのは、二姐ではなく、二姐の姑であり二官の母親である姜氏である。姜氏と二官は、二姐を離縁しようと仲人に相談することに決め、二官は仲人をもてなすための食材を買ってくる。これをかまどの上においておいたところ、隣の猫が魚を食べてしまった。原文を見てみよう。

老太婆心忙閑乱、忘記子灶上籃裡東道三哉。恰正隔壁甕鼻頭二阿叔、虱个一只猫跳退来、啣子去哉。老太婆勤々曉得吃得干々尽、怒氣冲天、就拉灶上搶一把刀、拿只猫一擄两耳。二嬌嬌扛々听见、要想尋陶氣、搥無豆緒（？）、想子半日、吓、有裡哉。前日子借把鎚刀不尽还个来、推豆还鎚刀退去尋相嗎哉。

慌忙走得去、叫道、阿姆、还子你一把鎚刀、々々柄壞落个哉。吾原未搭你放拉灶上去罷。

おばあさんは慌てて、かまどの上のかごの中に入れたご馳走の材料のことを忘れていました。その時、隣のか鼻の二おじさんの猫が家を抜け出し、跳びこんで来て、そのご馳走の材料を食べてしまいました。おばあさんが気がついた時には、もうきれいに食べられていました。(おばあさんは) 怒髪天を衝くほどに怒り、かまどの上から包丁を取り、猫をまつぶたつに斬りました。(猫の主人である) 二おばあさんはそれを聞きつけ、喧嘩をしようと思いましたが、やつて来るきつかけがありません。「あ、そや。ちよつと前に借りたスコップ、まだ返してへんかった。スコップを返しに来たつちゅうことにして、喧嘩したろ」そう言うと、急いで隣に行きました。

「おばちゃん、あなたのスコップ返しに来たで。スコップの取っ手壊れてるけど、かまどの上においとくわな。」

嬌々推門到灶前 おばさんがドアを開けかまどの前に行つたところ

一只猫糜两闲边 一匹の猫の開きができていた

鮮血淋漓真可惜 血がダラダラ流れてかわいそう
等時火冒就閑言 たちまち怒ってこう言った

吃落魚未還你肉 魚を食べたら肉を返せばいいだろ
う

任憑能算几化錢 たいしたお金じゃないだろう

就拿鏟刀一陳兜 スコップもって振りおろし

油塩搥子一灶前 かまどの前に油も塩もぶつちらか
した

した

碗盞壺瓶多搥碎 碗や杯 急須も瓶もみな割れた

鏝子打碎不連牽 鍋もこわれてつながらず

籃裡東西尽擡落 かごの中味もぜんぶすつかり落ち
ている

ている

鄉隣擁子一罷擺運 近所の人がゾロゾロ来て

口々声声張總甲 みな口々に岡っ引きを呼びに行く

官私要打二三年 裁判したら三年がかり

个只花猫天下少 この猫は世に珍しい

猫兒雖小值銅錢 小さい猫だが値段が高い

この場面は、『姑嫂双修宝卷』の四種類のテキストすべてに含まれている。史梅亭抄本は、字句の異同はあるが、この浦怡雲抄本とはほぼ同じとよい。無名氏抄

本は字数がかなり少なくなっている。呉維滋抄本には韻文がない。

この部分は、なぜ、どのようにユーモアなのだろうか。まず、猫がしたことと姜氏がしたことのつりあいが取

れていない。猫はただ姜氏の魚を食べただけである。猫

の飼い主である二おばさんの言うとおり、これは肉で弁

償することができるので、猫を殺す必要はない。しかし、

二官の母親は何も聞かずに、すぐ猫をまっぶたつに斬つ

た。猫を瞬時に「両辺開」するのは、じつさいにはほと

んど不可能なことである。現実を起こつたと想像してみ

ると、かなりグロテスクで残酷なことであるが、その不

可能性がこの場面を戯画化し、ユーモアにしていると思

われる。

次に、猫と人間のつりあいが取れていない。猫は魚を

食べて、人間に対して悪いことをした。本来は猫の飼い

主に弁償をもらうべきことである。しかし、二官の

母親は猫を罰した。この、「怒髮天を衝くほどに怒り、

かまどの上から包丁を取り、猫をまっぶたつに斬りまし

た(怒氣冲天、就拉灶上搶一把刀、拿只猫一擲兩片)」

というのは、人間と人間の闘いの描写と同じである。こ

うした「ずれ」がユーモアとなっているのである。

この猫を殺す場面のと、二官の母親と二おばさんの口げんかがあつて、最後に二姐が出てきて、その弁舌によつて二おばさんをやりこめる。ここは二姐の「快嘴」のクライマックスで、二官の母親と二おばさんの口論もあわせ、宣巻人はその口の技を存分に發揮することができる。猫を殺す場面は、それを導き出すためにつくられたものであるが、それだけではなく、この場面そのものも生き生きとして、ユーモアの表現になっている。

「ずれ」あるいは「不つりあい」「不均衡」は、ユーモアにつながる。ユーモアとは、私たちが見慣れたものやことがらを、意識的に表現しなおすことによつて、その「ずれ」を顕在化させ、それによつて人の笑いを引き起こそうとする表現形式である。この場面の「ずれ」がその好例であるし、さきの嫁入り道具のおもしろさ、また「ずれ」によつて説明可能である。さらに、『姑嫂双修宝卷』全体をつらぬく二姐の悪辣毒舌ぶりそのものが、日常の秩序から「ずれ」ており、ユーモアになっている。

おわりに

以上、『姑嫂双修宝卷』について、浦怡雲抄本を底本として、他の三種のテキストも参照しながら、ユーモアに焦点をあてて考察した。

はじめにも述べたように、宝卷は本来、信仰の宣揚を目的とする文学であるから、主人公の苦難、信仰、そして救済を描くことがもつとも重要である。しかし、『姑嫂双修宝卷』では、信仰と救済は背後に退いて、二姐というじゃじゃ馬娘の言動とそれが巻きおこす騒動を描写することが中心になっている。この特徴はとりわけ、浦怡雲抄本と史梅亭抄本にはつきり表れている。これはつまり、この宝卷が世俗化し、娯楽化したものであるということである。

宝卷は、宗教的な場から生まれた文学ではあるが、口頭の芸能のテキストでもあり、もともと、おもしろおかしい部分、ユーモアの要素をもっていたにちがいない。それは、現存するテキストにあらわれているときもあれば、テキストになくても宣巻人の即興によつて演じられたこともあつただろう。まじめな文脈にユーモアの要素

が散見されることは、むしろ、宝卷の特徴であった。

『姑嫂双修宝卷』はその部分を表に出し、定着させ、拡大したものと考えることができる。また、宝卷のほとんど、とりわけ清の後期の宝卷は世話ものであり、もともと、信仰の世界とあわせて、日常生活の描写など卑近な世界を活写することを得意としていた。それを背景に、二姐という人物を主人公にして展開させたのが、この宝卷なのである。聴衆には、どんなひどいことをしても、二姐が最後に改心することがわかっている。とすれば、二姐の度を越した悪辣や毒舌は、秩序からの逸脱として解放感を与えたに相違ない。

だからといって、この宝卷がすっかり娯楽になっ
ていくかといえば、それはちがう。この宝卷においても、救済が用意されているからだ。しかし、見落としてはいけないのは、題名の「双」と「修」のうち、明らかに「双」に力点が置かれていることである。すなわち、日常道徳である、嫂と小姑が仲睦まじくあることが、この宝卷では救いにつながっている。信仰は背後に退いて、日常道徳の教化、娯楽の提供が強調されたもの、それが、『姑嫂双修宝卷』なのである。

註

(1) 車錫倫『中国宝卷研究』第一章 中国宝卷概述 二、宝卷的分类。五—十六頁。() は筆者による。

(2) 車錫倫『中国宝卷総目』六十三—六十四頁、整理番号〇二九一。

(3) 『宝卷 初集』第三十九冊、一九二—二三二頁、『民間宝卷』第十四冊、一三三—一三三頁。ただし、『民間宝卷』では、一三九頁と一四〇頁が重複(二頁はもとの宝卷の二葉に相当すると考えられる)、そのため、あとの一頁分(『宝卷 初集』第三十九冊の二二〇—二二三頁にあたる)が脱落している。

(4) 顧希佳「紹興安昌宣卷調査」三、安昌宣卷の文化特徴(一)世俗性 (二)地方性 参照。

(5) 澤田瑞穂『増補 宝卷の研究』第一部 宝卷序説 第六章 宝卷の構造と詞章 —新宝卷 五十九—六十頁参照。ただし、ここに「光緒・民国期のものにはこれ(筆者注: 呉語で書かれた宝卷)が相当にあつて、彈詞とともに呉語文学の一群をなしている。ただし、それは主として呉語による彈詞をそのままに改作したことから生じた現象である」というのは、少なくともこの『姑嫂双修宝卷』にはあてはまらない。

(6) 原文の引用にさいしては可能な限りもとの字体に合わせた。句読は筆者による。

(7) これ以下、呉方言のあと()で置き換え可能な普通話を示す。呉方言の解釈については、石汝傑・宮田一郎『明清呉方言詞典』および閔家驥・范曉・朱川・張

嵩岳『簡明吳方言詞典』を参照し、これらの辞典にないものは、上海で生まれ育った筆者の解釈あるいは推測によった。

- (8) 翻訳は松家裕子『杏花宝巻——楽善堂版日本語訳』による。

- (9) 原文は顧希佳「紹興安昌宣巻調査」、翻訳は顧希佳著、松家裕子・仇俊訳「紹興安昌の宣巻調査」による。

- (10) しかし、これによって、呉維淞抄本には宗教的な性格がない、あるいはうすい、とすぐに結論することはできない。宝巻をうたいかたるさいには、宗教的なさまじり文句はテキストに記されないことも多く、開巻偈がないことは、むしろ、このテキストが宗教的な場で生きていたことを示している可能性もある。

- (11) ふたつのテキスト間の異同は以下のとおり（以下、史梅亭抄本、浦怡雲抄本の順に示す）。「従来」と「原来」、「和合少」と「和合好」、「媳婦」と「新婦」、「冤家」と「冤嫁」である。

- (12) 佐藤仁史ほか『中国農村の民間藝能』第三部 宝巻篇、朱火生氏宝巻、5「劉王巻」三三五—三四九頁。

- (13) 『中国農村の民間藝能』第二部 口述記録篇、口述記録、2朱火生1、および3朱火生2、一〇九—一四一頁。

参考文献一覧

高可・宋軍・張希舜・濮文起『宝巻 初集』第三十九冊・第二十八冊、山西人民出版社

周燮藩主編、濮文起分卷主編『民間宝巻』第十四冊、黄山書社、

二〇〇五年

車錫倫『中国宝巻研究』広西師範大学出版社、二〇〇九年

車錫倫『中国宝巻総目』北京燕山出版社、二〇〇〇年

鄭振鐸『中国俗文学史』上海書店、一九八四年（商務印書館、一九三八年の影印）

陸永峰・車錫倫『靖江宝巻研究』社会科学文献出版社、二〇〇八年

朱海濱『祭祀政策与民間信仰變遷——近世浙江民間信仰研究』復旦大学出版社、二〇〇八年

澤田瑞穂・増補 宝巻の研究』国書刊行会、一九七五年

佐藤仁史・太田出・藤野真子・緒方賢一・朱火生『中国農村の民間芸能——太湖流域社会史口述記録集2』汲古書院、二〇一一年

石汝傑・宮田一郎『明清吳語詞典』上海辭書出版社、二〇〇五年

閔家驥・范晔・朱川・張嵩岳『簡明吳方言詞典』上海辭書出版社、一九八五年

松家裕子『杏花宝巻——楽善堂版日本語訳』（『中国近世唱導文藝研究——江南地区における実態調査』二〇〇九年

度科学研究費・基盤研究（C）、研究代表者：松家裕子、課題番号：二〇五二〇三四一報告書（2）、二〇一〇年

松家裕子・小南一郎・磯部祐子『中国近世唱導文藝研究——江南地区における実態調査』二〇〇八—二〇一〇年度、科学研究費、基盤研究（C）、研究代表者：松家裕子、課題番号：二〇五二〇三四一、研究報告書（1）、二〇一〇年

一年

松家裕子・小南一郎・磯部祐子・要木（藤田）佳美『中国江

南唱導文藝研究——上演・テキスト・信仰』二〇一

一（二〇一三年度、科学研究費、基盤研究（C）、研究

代表者・松家裕子、課題番号・二三五二〇四四五、研

究報告書、二〇一四年

顧希佳「紹興安昌宣卷調査」『民俗曲芸』第一二七期、施合鄭

民俗文化基金会（台北）、二〇〇〇年九月、所収

顧希佳著、松家裕子・仇俊訳「紹興・安昌の宣卷調査」『追

手門学院大学』アジア学科年報』第五号、二〇一一年

十二月、所収